『WWW』

樋口ミユ

登場人物

男

娘

母

涅槃の男

その舞台には今はまだ何もない。
唯一あるのは一本の白い境界線。

若い男は拡声器を手にやってくる。
観客の間を通りながら。
満員なら観客をかき分けかき分け舞台まで時間がかかりそう。
それはうれしいことだけど。
余裕があるならそう時間はかからず舞台へあがる。
ウィンウィィンと拡声器からサイレン。
「本日は、」と男は前説を始める。
劇場でよく聞くいつもの前説、変わりなく、ひとつだけ変わったこと。
増えた項目、
「なお、地震の際は、」
男は最後まで前説を終える。

「…と、新しい項目が付け加えられたこれが、これからの前説の基本となる」

パツンと暗闇。
サイレンが鳴りっぱなしの暗闇の中から突如、
無数の人々の「ＷＡ――――　！」と叫ぶ顔が代わる代わる見える。
誰でもかまわない。あなたでもいいし、あなたでなくてもいい。
細切れの、無数の、叫ぶ顔。
あまりの速さに、※お部屋を明るくして見てね　というテロップを入れたくなる。
いつのまにか、舞台には何か「ある」
と、思った時に「ＷＡ」と叫ぶ誰かの顔も消える。

シュッと、マッチのこすれる音。
火薬の匂いがする。
さきほどの若い男が、ランプに火を灯す。
風が吹いても消されることがないような、
しっかりしたランプ。
若い男はぐるりと空間を見た。
そこに。
寝台がひとつ。
その上に、真白な布に包まれたものが横たわっている。
若い男がそれをじっと見ている。

やがて、若い男はその真白な布をはらりと解いた。

「なに見てるんや」

若い男は息を詰める。

「なに見てるんや」

若い男は一度、ごくんと咽を鳴らした。
ランプの灯り。
目を凝らしてみる。
うっすらと、見える。
寝台の上には涅槃の男。
くっちゃくっちゃと、何かを噛んでいるような
不愉快な口の音。

「なに見てるんや、ちゅうてんねん」

涅槃の男はもうずいぶん昔に生きていた男。
今はミイラとなってそこに横たわっている。
若い男は、ただ静かに手を合わせた。

男　そこは、かつて僕の、僕らの故郷でした。定かではありません。だったのかもしれない、と言うほうが正しいでしょう。僕らは自分たちの起源を探し続けていました。簡単なことです。黒い頭髪と、黒い瞳を持った僕ら。生まれたての小さなお尻には青い青い、地球のように青いシルシがある僕ら。便器をきれいに磨く僕ら。そんなものでは括られはしないが。生粋の僕らはもうさほど残ってはいませんから。僕らは、どこから来て、どこへ行くのか。ぷっつりと途切れた歴史の向こう側。

男、もう一度、ぐるりとその空間を見た。

男　ここは、かつて、僕らの、故郷、だった、のかも、しれない。
僕らの言葉はやがて消滅するでしょう。僕らは、この言葉を日常的には使わない。家庭でさえも使わない。同郷だと思う相手であっても、そうだとは限らないので、使わない。僕らはこの言葉で未来を語ることを放棄しはじめた。過去を悔やむことも放棄しはじめた。このような独り言は口からこぼれると町を歩く足音に踏みつけられてへしゃげる。今のことだけを考えよう

とした結果未来その先には、僕らはこの言葉を失うだろう。人間は未来と過去のことを話さないと、今さえも失ってしまうのだと、僕は予感している。そして語るべき言葉を失うと、それを表すモノさえ、消えてしまうのでしょう。はじめまして。僕らの…なんて呼べばいいのか。ご先祖、と、いうわけでもなし。オリジナル、と、いうわけでもなし。僕らの、故郷で生きていた、僕らと同じ姿をしていただろう、あなた。

くわぁと、涅槃の男はあくびをした。

涅槃　今なんじ？
男　…
涅槃　どんくらい、時間、過ぎたんやろか。
男　ずいぶんと。考えられないほどの時間が経ったんでしょう。
涅槃　そら俺も、こんななるわ。床ずれかな。あっ、足、硬なって、これ…
男　ぷっつりと途切れた歴史のこちら側では、小さな小さな奇跡の島は、神話だと思われていましたから。
涅槃　ああ、風か？いや、吹いとったか、風くらい。気づかんかっただけや。暢気なもんやで。

がはは、と涅槃の男が笑う。

男　見えないモノに侵され続け見えないものとされていましたから。足踏み入れることもないと思われていましたから、ここに。あなたのような人がいるとは思っていませんでした。
涅槃　君回りくどいなぁ。で、何がどないや？
男　僕は、ここで、一体のミイラを見つけた。

男は、ゆっくりと合掌の手を下ろした。

涅槃　…
男　…
涅槃　…
男　…
涅槃　え、俺？
男　はい。
涅槃　即答やな。
男　はい。
涅槃　ミイラになっとる？
男　はい。

涅槃　まじで？
男　はい。
涅槃　それって結構すごいよな？
男　はい。
涅槃　他にはおらんか？
男　はい。
涅槃　つっても、朝にならんとなんも見えへんか。
男　はい。
涅槃　いや驚くでこれ。
男　はい、
涅槃　ええ！
男　はい。
涅槃　おぉ！
男　はい。
涅槃　よぉ！
男　はいと言ってる、僕はなんでこんなに即答で返事をしてるんだろう…
涅槃　俺の質問に答えてるんやろ？
男　…
涅槃　ちゃーう？
男　…ああ、
涅槃　やろ？
男　ああ、そうか…あなたは、もう、語っているんですね。

男は涅槃の男をじっと見た。

涅槃　なんか、よう寝てたような気するわ。どんくらい経ったんやろ、ああ、えらい時間過ぎたんやったかなぁ。よう、寝てた。夢見てたような気もするけど、どうやろな。ミイラが夢とか見れるもんか、なぁ。夢ん中であれや、なんか、白いおばはんが、俺に言いよんねん。キチガイみたいに叫びながら、言いよんねん。

「人間なんか、ただ食って飲んで犬のようにはいつくばって歩きまわる。時々目が醒めて、少し、喋る。人間なんて、そんなもんや」

てな。時々目が醒めて、少し喋る、時々や。時々しか、喋ってなかったんか？なぁそしたら、俺は今、時々のうちのひとつ、ちゅうことかなぁ。で、どう？
男　…？

涅槃　どうや、ちゅうてんねん。
男　…？
涅槃　ご機嫌いかが、ちゅうて。
男　…？
涅槃　なぁ、にいちゃん。世界は。

男、何かの用意をはじめる。
杯とお酒。
バケツと体を拭くタオル。
ブラシ、髭剃り、爪きり、
身だしなみを整えられるようなもの全て。
きれいに地面に並べ始める。

男　世界は。境界線だらけの、
涅槃　へぇ。
男　いろんなところから、
涅槃　ほぉ。
男　西からの境界線と、東からの境界線とがやがてくっついてしまうんじゃないだろうか。
涅槃　よう分からんけど、まぁ、ご機嫌ななめちゅうことやな。
男　はい。
涅槃　ふぅん。ヨクバリは、やめれんかったちゅうことやなぁ。

杯を置き、

男　だから、もっとあなたに、

酒を注ぐ。

男　語ってもらおうと思います。

涅槃の男の目の前に差し出した。

男　どうぞ。

涅槃の男は、ギチギチ、ぎこちなく手を伸ばす。

涅槃　長い間やったから、固まってしもてな。

やっとのことで、涅槃の男は酒を飲みほした。

男　いい飲みっぷりですね。
涅槃　おう。
男　ミイラのわりには。
涅槃　咽かわいてたんや。
男　納得です。
涅槃　これうまいか？
男　おいしくなかったですか？
涅槃　ようわからん。俺ミイラなんやろ？
男　ですね。
涅槃　だいぶ前に飲んだの、思い出してみるわ。あれいつやったかなぁ。

男、自分の盃を涅槃の男に掲げた。

男　僕もいただきます。
涅槃　おう、飲めや。

男、一気に飲み干す。

涅槃　うまいか？
男　複雑な味です。
涅槃　複雑な感想やな。
男　始まりの儀式の一杯ですから。
涅槃　（またもう一杯を注いで飲む）

男、もう一度涅槃の男に空の盃を掲げて、コトリと地面に置いた。

男　はじめさせてもらいます。あなたに敬意を払います。決して冒涜ではありません。
涅槃　おう。なんやよう分からんけど好きにし。俺抵抗できるわけちゃうしな。

男、涅槃の男の体を真っ白い布でぬぐいはじめる。
丁寧に。
ぽつりぽつりと、男は言葉をこぼす。

ぽつりぽつりと涅槃の男もそれにこたえる
髪をとかし、爪をきり、まるで介護するみたいに
きれいに、きれいに、きれいに。
最大の敬意を払う。

男　今では、奇跡の島だったと、誰もが言います。ご存じですか？
涅槃　んー？いまぁ？ミイラはミライのことは知らん。おう、結構気持ちええなぁ。
男　はい。だから、過去のことを教えてもらいます。
涅槃　にいちゃん、あほやなぁ。
男　…
涅槃　過ぎたもんは見えへんもんやで。
男　それはあなたが教えてくれると思っています。
涅槃　ただ見てたんや。ただひたすらや。いくら見たところで、なぁんにも見えへんのになぁ。

男、何かに気がついた。

男　手首に…何重もの…ヒモ？

ミイラの手首をぐるぐると、皮のような、糸のような、
もうぼろぼろになった紐が巻かれている。

涅槃　あー…それ何やったかなぁ…
男　…っあ。

気が遠くなるような年月によって、男が触れた瞬間に
それはぼろりと崩れ落ちた。

男　すみません。きちんと保存します。

男はその欠片をきれいなビニール袋のようなものの中に入れた。

涅槃　そうや…あれや。ああ、思い出してきたわ。手首のあのぐるぐる。思い出した…

涅槃の男はギチギチと指を伸ばす。
空中へ。
何度か指を曲げる。

男　指の角度、引き金を引く角度…？似てるけど、違うな…これは…

男、涅槃の男の指の格好を何度もまねてみる。
真似ているうちに、男の指になじむモノが現れる。
指の角度は、拡声器のサイレンのボタンを押す角度。
ウィィンウィン、と。

サイレンの音。

男　横たわったミイラが語る指先、見えるか、それが。

「それが俺がただひたすら見てきたもんや」

ＷＡ
ＷＡ
ＷＡ
ＷＡ
ＷＡ
ＷＡ
ＷＡ

と、白い女たちがゆっくりやってくる。
髪の毛まで真っ白な女。
何かが付着でもしているような。
女たちは実際は２人ぽっちだろうけれど、
２人の女の影は無数にある。
それは無数の、すべての女たちだ。
崩れて、また天へ手を伸ばして立ち上がる。
一歩進むごとにまた崩れて、それでもまた立ち上がる。
女たちの歩みは一千年の長さを感じるのに、
言葉は音速を超える。
言葉は言葉として認識できなくてかまわない。
言葉はただの記号になってかまわない。

WA

1905

WA

1914

WA

1923

WA

1925

WA

1927

WA

1930

WA

1933

WA

1943

WA

1944

WA　WA　WA

1945

WA

1946

WA

1948

WA　たし

WA　ーるど

1952

WA　たし

1958

WA　らう

1960

WA　すれて

1961

WA　らう

1962

WA　れわれ　WAWAWA

1964

ＷＡ　んだふる
１９６５
ＷＡ　ーるど
１９６８
ＷＡ　からんけど
１９７４
ＷＡ　らうの
１９７７
ＷＡ　すれた
１９７８
ＷＡ　んだー
１９７９
ＷＡ　たぼこり
１９８２
ＷＡ　らわなな
１９８３
ＷＡ　らわなな
１９８４
ＷＡ　たがし
１９８６
ＷＡ　けたるＷＡ
１９８９
ＷＡ　っくす
１９９０
ＷＡ　けたるＷＡ
１９９３
ＷＡ　らわなな
１９９４
ＷＡ　らってな
１９９５
ＷＡ　すれたら
２０００
ＷＡ　らわなな
２００１
ＷＡ　っしょい
２００３

ＷＡ　らえ
２００４
ＷＡ　んだふる
２００５
ＷＡ　ーるど
２００７
ＷＡ　たがしな
２００８
ＷＡ　けたるＷＡ
２００９
ＷＡ　らってな
２０１０
ＷＡ　っしょい
２０１１
ＷＡ　らわなな

女たちは何度も崩れては立ち上がってやっとのことで
椅子に座る。

男　ご町内の皆様。ご機嫌いかがや、ちゅうて。

これより、涅槃の男のかわりに、その若い男が語る。
涅槃の男はミイラのまま寝台の上に、涅槃。
しかし寝台は食卓へと変化する。
両側に椅子が二つ。
白い女たちが向かい合って食事を始める。
「ご町内の皆様、ご機嫌いかがや」
の声はいつまでも続く。
女たちは黙々と食事を続ける。

「本日の出航は午後３時の一便のみ、一便のみ、一便のみやで」
「聞こえてるかー」
「返事ないなー」
「おかしいなー」
「食事中やからかなー」
「大音量で言うてるのになー」

「受付待っとるでー」
「耳栓しとるんかなー」

娘　聞こえてるわ。
母　…
娘　大阪もくるって。
母　もうきたやない。
娘　さらにまたくる。
母　せやろな。
娘　私、もう、行くで。
母　せやな。
娘　頭かゆいし。
母　うん。
娘　じゃりじゃりやし。
母　砂がな。
娘　っあ…！
母　どないしたん？
娘　砂…
母　風きついからなぁ。
娘　なんなん。
母　…
娘　なんなんよ。
母　食べへんの？
娘　お母さん、行く気ないん？
母　…
娘　もう私ら以外残ってる家ないで。
母　…
娘　なぁ。
母　お父さん。
娘　…
母　帰ってくるかもしれへんやん。
娘　…うん。
母　あんたは行きなさい。
娘　すでに行きにくいわ。
母　それでも行きなさい。
男　行くんやったらここに名前な。

娘　今食事中ですから。
男　知ってるって。
娘　こっからこっちが、うちの家やから。
男　もうなぁ、お前んとこだけやで。
娘　知ってます。
男　他みーんな行ったんやから。
娘　分かってます。
母　ご迷惑おかけします。
娘　ええて、そんなん。こいつ自分が早く出たいのに私らおるからせかしてるねん。
男　そんな言い方ある？
娘　だってそうやん。
母　大変やねぇそのお仕事も。
男　分かってもらえます？
娘　いんじゃんで負けたん？
男　お前は助け合いとか人の和とか繋がりとか絆とか分からんのか。
娘　だってあんたもともとそんなニンゲンちゃうやん。
男　こういう時やからこそ本気の俺が初登場なんじゃ。
娘　財布拾って６千円山分けしようぜとか言うてたやろ。
男　そんな古傷ほじくり返すなや。
娘　求人雑誌代けちって、いるページだけ破いて面接とか行ってたやろ。
男　それはちゃんと面接受かったから文句ないやろ。
娘　まず面接行く権利ないし３日でやめるんやったらページ破んな。
男　お前の口癖の「私悪くないし」に比べたら俺はめっちゃええヤツやねんぞ。
娘　だって悪くないし自分で言うあたりが小さいわ。
男　小さい言うな。お前なんかめっちゃちっさいやんけ。
娘　ハッ。心の話をしているんですけれども。ちょっと内容が高度すぎましたでしょうか。
男　見たんか？見たんか俺の心。見えるんか俺の心。何色してるねん、どんな大きさやねん？見たんか。
娘　ええ、ええ、心は言語に現れますのでねえ。
母　…あんたら。
娘男　はい。
母　レベル低いなぁ。
娘男　…
母　結婚したら？
娘男　は！？
男　お母さん、お母さん、それはイカンわ。それ言うたら終わりやって。

娘　お母さん、お母さん、自分の娘をみすみす不幸の渦に放りこむような発言あかんわ。
男　不幸の渦、（って俺か？）
娘　不幸の渦。（ってあんた）
男　お母さん、娘さんの教育どこで間違われたんですか？
母　夫に似ましてん。
娘　お母さん。一回付き合ったけどあかんかったやん。知ってるやろ？バイトやめて寝転んでテレビ見て、３日分は食べられるカレー作り置きしてたら１人でたった１日で平らげて悪いとも思わんとなんて言うた思う？「すっげうめかった」
男　あんのカレーはうめかった。
母　結婚したら？
娘　せん！
母　１人は心細いで。
娘　いつまでも１人ちゃうし。
母　そうやわ。結婚させよ。
娘　ちょっと！
母　役所てまだいけるん？
男　え、まだ、なんとか。
母　ほなもろてきて。
男　なにを？
母　婚姻届。
男　…お母さん。

なんだか、真剣な空気が生まれた。

娘　ちょ…、

真剣すぎて照れくさい。
母、深々と頭を下げた。

母　よろしくお願いします。

男、真剣に受け止めて、

男　丁重にお断りさせてもらいます。
娘　なんか私がお願いして振られたみたいな構図になってる！
母　二人とも照れてから。

娘男　照れてない。
母　息ぴったり。
娘男　ちゃうから。
母　ほら。
娘男　暴走しすぎ。真似すんな。
娘　お前がな。
男　お前やろ。
母　あかんよ！

男と娘は、はたと足元を見る。
境界線の１本ライン。

娘　昨日まで、もうちょっと向こうやったのに…
男　だから言うてるやろ。早く行けって。

じっと、その境界線を見る３人。

男　境界線なんか、曖昧やねんから。
娘　アイマイ？
男　この１本ラインのこっちとあっちで、はっきり分かれるわけないやろ。
娘　じゃこれ何のためなん？
男　目安。
娘　見えへんのに？
男　見えへんからやろ。
母　ご飯食べたん？
男　え…いや、まだです、けど。
母　食べていかはったら？
男　え、あ、でも。
娘　名前書くわ。貸して。
男　ああ。
娘　お母さんもな。
母　…
娘　書くで。
母　名前だけな。
娘　それどういう、
母　そうせな、残らなあかんのやろ？

男　や、俺のことは別に、
母　書くだけ書いといて。

　　母、受付用紙に名前を記入した。

母　ご飯食べたら、荷造りしなさい。

　　母は、黙々と食べる。
　　娘も座って食事の続きをする。
　　男はただじっと見ている。
　　涅槃の男は食卓の上でひとつあくびをした。

涅槃　くう、き、じかぁ、ぁん、ほしのお、ぉじ、りぃ、すく、ほん、しぃぃぃぃぃん、ぎょ、うかぁん、でん、ぱ、ぁあ、ごぉ、っど、みぃ、ぃら、ぁい、それから…まだまだあるな。見えんのに、耳には残ってるわ。WAWAWAWAWAWAWAWAWAWAWA、まだ聞こえるで。

　　母はしゃがみこんでうつむいて、
　　じっとその境界線を見つめている。
　　その母を娘がじっと見つめている。
　　その２人を男はじっと見つめている。
　　涅槃の男はミイラの鼻歌を歌う。
　　できれば「上を向いて歩こう」がいい。

母　…見えんもんやねぇ。

　　母、ゆっくりと片足を上げた。
　　境界線のその向こう側へ、足を下ろそうとする。
　　ぴたりとミイラの鼻歌はとまる。

娘　何してんの！？
母　なんも。
娘　してるやん！
母　荷造り終わったん？
娘　するほどない。
母　とりに行ったろか。
娘　………は。

母　なぁ、とりに行ってきたるから、待っとき。
娘　はっ…！？

母、ゆっくりとつま先を、向こう側へ、
下ろした。

娘　何してんの！？あほか、あほやろ！？
母　そうかなぁ。
娘　かなぁ、ちゃうわ。
母　だってな。
娘　…

母はまたしゃがみこんで境界線を見つめる。

母　こっちとあっちで、何がそんなに違うんや？
娘　…目印やろ。
母　このラインがか？
娘　見えへんねんから。
母　お母さんがずぅっとちっさい頃は、向こうのほうにあったのにどんどんこっちに来て、ほんで、また明日になったら、もうちょっとこっちになるかもしれへんやろ？
娘　だから、目印なんやんか。
母　そんな操作できるもんかぁ？
娘　私に聞かれたって知らんわ。計測器見てよ。
母　うん、それはまぁまだ大丈夫やねんけどな。
娘　なぁ、もう行くで。
母　これかて、目印やろう？
娘　お母さん、ピンク色がいいって言うて交換したったやんか。
母　ピンクがええわ。優しい色やし。
娘　私何色でもええしもぉ。
母　でもなぁ。
娘　…
母　これかて、どこまで信用できるん？
娘　そんなん言い出したら、
母　操作できるもんかぁ？なぁ。
娘　…
母　ヒトが作ったもんやで。
娘　お願い、立って。

母　火事なぁ、
娘　え？
母　覚えてるやろ？
娘　それがなに？
母　家、昔、火事なったやろ。それ思い出してん。
娘　めっちゃ前の話やん。
母　不注意っていうか、事故っていうか、
娘　その話はええって。
母　なんもなくなってしもて。
娘　…
母　あんた小学生で、裸足で逃がして、夏やったのに、アスファルト熱かったやろ。
娘　…うん。覚えてる。
母　あっちゅうまやったわ、あれ。火てな、根本に水かけんかったら何も効果あらへんねん。消防車のホースから水出てたけど、火のさきっちょにしか当たらへんかってな。家て、木で出来てるんやわぁって、その時思ってん。がろぉん、って柱が落ちてなぁ。隣のふみちゃんの家もめちゃめちゃやったわ。独特の匂いがするねん。焼けた木に水がかかったら。今も同じ匂いしてるわ。火てな、気がすんだら消えていくねんなぁ。色んなもんかっさらったら、気がすむねん。なぁんも、残らんかったわ。おばあちゃんの鏡台の下の引き出しから、お金がちょっと出てきてん。近所の、かっちゃんとこのお父さんが焼け跡の片付け手伝ってくれてて、「おばはん、金や、金あったで」って叫んで。恥ずかしかったわ。へそくりしとったんやて思われて。お金いるのになぁ、そんなこと考えてたわ。でもなぁ、あの時、やる気はでたな。誰も怪我なかったし、それだけでええて、ほんまに思ったわ。不思議なもんやで。なんもなくなったら、人てやるしかないって思うねん。歩くしかない、思うねん。掴むもんなくても立つしかない、思うねん。あの気力はどこから来てたんやろか。
娘　私は嫌な思い出しかないわ。
母　Tシャツ事件やろ。
娘　着るもんないからクラスの男子がくれた。
母　ああ、新庄君やったかいね。
娘　だっさい文字入りTシャツ。
母　くれはってんから。
娘　いらんもんばっかりな。
母　リサイクルって根本的にそういうもんちゃうん。
娘　そやのに、休み時間に喧嘩して、私のゲンコツもろにくらって半泣きしながら、「お前このまえやった服返せ。あれ、俺のやねんぞ」
母　ゲンコで殴ったらいかんわ。
娘　ダサくない？あげたクセして返せ、て。みみちくない？誰がいるか言うて、脱いで返した

ったわ。
母　上半身、裸でブルマだけ履いて家帰ってきてからに。あれはエロいわ。帰り道にヘンなおっさんにヘンなことされんでよかったわ。損な性格やねぇ。可愛げないうえに、やせ我慢して。
娘　それだけちゃうし。
母　恨みがましい子やねぇ。
娘　あの頃の私のあだ名知ってる？
母　『両隣三軒全焼』
娘　そのまんまやん。みたままやん。ひねりいっこもあらへん。あほちゃう。
母　しゃあないやん、子どもなんかみぃんな、あほやねんから。あんたもな。
娘　小２の男子はあほで残酷やで。そうや、あれがトラウマで私、小２っぽい男、見たらイライラするんやわ。
母　小２っぽい…？そんな人おる？
娘　おるやん。だいたい男なんか小２か、小４か、中二、この三つに分けられるやん。
母　お母さん、あんたの育て方間違ったかもしれんわ。
娘　女もそうやん。乙女になるか、おっさんになるか、女性になるか、この三つに分けられるやん。
母　お母さん、やっぱり育て方間違ったと思うわ。
娘　そういえば、あいつ小２っぽいもんな。
母　足広げな。
娘　ああ。
母　あんたは、ちっさいおっさんになってもたねぇ。
娘　小学校の頃からかわってないねん、わたしも。
母　…あの日も暑かったなぁ。
娘　前のことやん。
母　うん。
娘　どうにかなったし。
母　うん。
娘　自分のもんがいっこもないって泣いたんは、あの時は私１人だけやったから。
母　…今はな、
娘　今はそれも共有。
母　今は、
娘　？
母　どう立ったらええか、分からんのよ。
娘　…
母　立とう、思うんやけど。立ち方忘れたんやろか。
娘　立って。３時やから。

母、じっと動かない。
娘　立ってって。
が、
母　そうやな。
娘　なに？
母　そやわ。あんなぁ、お母さん、帰るわ。
娘　…え？
母　この境界線の向こう側。
娘　…
母　家帰るわ。
娘　何…
母　あんたが言うみたいに計測器信じるんやったら、ここでもあそこでも、変わらんやないの。
娘　いや、そこまで信用するのはどうやろ。
母　やる気出して、立て直したんやであの家。
娘　知ってるけど。
母　それに、そこしかないやん。お父さん、どこ帰るんよ。
娘　もう帰ってけぇへん！
母　…知ってるけど。
娘　行くで。
と、娘はぐっと腕を持つが、
石のように動かない母。
びくともしない。
娘だけが、動き回る。
力を入れても、何も動かない。
娘　いい加減に、しっ…！
母、勢いよく立ち上がった。
娘は思わず転がる。
娘　急に、なに？
母　決めたわ。

娘　は…
母　お母さん、帰る。帰って、１人反抗期する。
娘　は？
母　お母さん、１人で「スイッチをひねらない自活する会」を発足するわ。
娘　なにそのフェリシモみたいな名前…
母　あんた、はよ行きなさい。
娘　意味わからへん。
母　海越えるんよ。
娘　…え？
母　はよ子ども作りや。
娘　まず相手やし、
母　靴下は二枚履きやで。
娘　そんなことして何の意味があんの？
母　冷えたら体に悪いやないの。
娘　そっちちゃう。
母　ケツふかさなあかんやろう？
娘　…？
母　お母さんもう全部やったから、別に老後ぽかぽかしたところで暮らさんでもええねん。どこで、誰と、どうやって暮らしたかったか。誰でも考える未来のことやんか。それが、なぁ、今は、これ、なんえ？

母、境界線の向こう側を見た。

母　なんでこんななってしもたんか、どうなっていくんか、お母さん、証明せなあかんと思うねん。せやないと、忘れるやろう。ヨクバリは、人間の得意技やんか？
娘　そんなん、誰も頼んでないで…
母　そんなことないわ。
娘　誰に、何を証明したいん？
母　それは…
娘　…
母　未来の人が決めたらええわ。

ｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉｐｉ

空気を切り裂くように、ビリビリしたホイッスルが鳴り響く。
男が拡声器のサイレンを鳴らす。
しきりに誰かが何かを叫んでいる。

パツンと暗闇。
サイレンが鳴りっぱなしの暗闇の中から突如、
無数の人々の「ＷＡ――――　！」と叫ぶ顔が代わる代わる見える。
誰でもかまわない。あなたでもいいし、あなたでなくてもいい。
細切れの、無数の、叫ぶ顔。
はっきりと聞こえるのは、拡声器から男の声。

「押さないで、押さないでください」
「それは駄目です、押すなって」
「境界線を越えないでください」
「繰り返します」
「境界線を越えないでください」
「境界線を越えないでください」
「境界線を越えないでください」
「境界線を」
「超えないで」
「おい」
「超えんな」
「超えんなって、あかんって」
「戻れ」
「戻ってきてください」
「戻って、」
「戻って…」
「戻れや」
「頼むから」

雨なんか降らなかった。
何食わぬ顔して朝日が差し込んでいる。
境界線のこちら側には、
娘と拡声器を持った男だけが突っ立っている。
境界線の向こう側を、ただじっと見つめている。
そんな２人を、涅槃の男は見つめている。
２人は境界線の向こう側を見たまま。

娘　３時の便で？

男　…うん。
娘　戻ってきたん…？
男　…うん。
娘　なんで？
男　全員ちゃうけど、半分くらいかな。
娘　そうなん。
男　メドがついたからって。
娘　なんの？
男　これからの。
娘　これから？
男　子どもがいる家は、戻ってきてない。成人してたら別やけど。
娘　あんた、
男　うん？
娘　いよいよ出て行かれへんな。
男　仕事やからな。
娘　もう、いこ。
男　そか、お前、明日の便に乗るか？
娘　１人ちゃう。２人分。
男　誰と？
娘　どんくさいな、あんた。
男　うん？
娘　仕事なんかどこでもなんとかなるやろ。
男　…うん。
娘　逃げたらええやん。
男　…うん。
娘　カッコ悪ないで。
男　…うん。
娘　私は行くで。
男　うん。
娘　行くで。
男　うん、行けや。
娘　なぁ、一緒にいこ。
男　俺、説得しなあかんから。
娘　…
男　仕事やし。
娘　小２男がエラそうやわ。

男　え、なんて？
娘　あんたには説得なんか無理やって言うたの。
男　何があるんかな。戻る理由は、何なんやろう。
娘　全然、意味分からへん。
男　お母さんと、話したんやろ？
娘　話したら、分かる？何考えてるか、ほんまのトコロ、見えるわけちゃうし、見えたところで理解できる？
男　お前にまで来いって言うたあらへんやろ。
娘　そんなん言われたらたまらんわ。気おかしなってもうたんやわ。
男　そうかなぁ。
娘　はっ…？
男　俺は、なんとなく分かるわ。
娘　私そういうの大っ嫌い。
男　そういう？
娘　自分のことばっかり考えてて何があかんの。だって本心そうやねんもん。そういう風に私のこと見てるやろ？違うところでいくらでもやり直したらええやん。それがそんなに恥ずかしいことなんかな。なんでここやないとあかんのよ。
男　お前ちょっと話がズレてる。
娘　なにが？
男　あかんとか、ちゃうねん。
娘　…
男　俺、見ときたいなと、思うねん。
娘　何その使命感。
男　そうなんかなぁ。
娘　私１００まで生きたい。
男　うん、いけそう。
娘　皮肉か。
男　皮肉や。
娘　皮肉が言える知的思考があったとは驚きやな。
男　…
娘　小２男が皮肉を扱えるとは。見たまんま発言しかせんと思ってたのに。
男　…
娘　あ、もしかしてあれ？私との会話中に急成長したんちゃうん？
男　お前、
娘　なによ？
男　怖いんか？

娘　…なんでよ？
男　？
娘　普通なことしか言うてないやん。
男　…
娘　普通に生活して普通に暮らしたいって言うてるだけやん。
男　…うん。
娘　そやのに、なんで自分のことこんな卑しいて思ってしまうんやろ。
男　…あんなぁ。
娘　…
男　今のこれが、今の俺らの普通や。

男、境界線の向こう側を見た。

娘　こんなん、普通と違う。

娘は持っている計測器を外して捨てた。
男が黙ってそれを拾う。

男　持っとかな。

娘の手に戻す。

男　あ。
娘　…なに？
男　聞こえるなぁ。
娘　…静かやわ。異様に。
男　向こうから。

男、境界線の向こう側を指さした。
母や、他のたくさんの人たちが住む向こう側。

男　「普通とちがうわぁ！」

と、男はいきなり絶叫した。

娘　なっ…？

男　って、聞こえるわ。向こうから。「よう見とけぇ！俺らが証明したる！これが普通なわけないやろぉ！」って、俺に向かって言うてる。
娘　…
男　絶叫が聞こえる。
娘　私には、なんも聞こえん。ひっそりしてるだけや。
男　俺には抵抗が聞こえる。
娘　そんなんしたって変わらへんわ。無駄やわ。変わってたらもうちょっとマシになってるはずやん。
男　なる。なるって思わな。
娘　もう、別に今、ちょっと希望めいたいいカンジな話したいんちゃうねん。
男　何やねんお前が言い出したんやろ。
娘　行こう。
男　…
娘　あんたも行くねん。
男　行かん。俺、見てる。お前もうはよ行けや。

娘、グーで殴ると男は簡単に転がる。

男　っつあーーーー！

へちょっと座り込んで、

男　やめてぇ、顔をグーで殴るのやめてぇ。

ほっぺたを抑える男の手を娘がつかむ。

男　二発目とかやめてぇ。…ちょ、お前調子のんなよ。一発は一発やからな、え、おい…

娘は殴るわけではない。

男　なんやねん、お前、女の子がグーで殴ったらいかんって…

娘はぐるぐると、男との手首と自分の手首を紐でしっかりつなぎあわせる。

男　…何してるねん？

男　何してるねん。

男　何してるねん。
男　何してるねん。
男　何してるねん。
娘　あんたと一緒になるねん。
キツクキツク、娘は紐を結ぶ。
何重にも結んで、紐はこんもりと盛り上がる。
男と娘の手首はがっちりと結ばれて、
もう離れない。
涅槃　見えるか。
男　いいえ、はっきりとそれとは。
涅槃　見えるか。
男　皮膚組織が付着しています。
涅槃　見えるか。
男　血痕がなく、止血のためのものではないでしょう。
涅槃　見えるか。
男　ちょうど、もう1人分の手首が入るくらいの余裕があります。
涅槃　見えたか。
男　しかしそれがなんのためであるか僕には分かりません。
涅槃　見えるわけもないか。
男　明日の朝になればその向こうに足踏み入れればまた何か分かるでしょうか。

涅槃　超えるか、その境界線。

男、境界線の向こう側を見た。
瞬間。
ＷＡ――――――――――
と、絶叫を上げる。
男の目の中にチカチカ風景が映る。
目を背けようとすると、

娘　見ぃや。あんたが見たいって言うたんやろ。

片時も離れない娘が男の顔を固定する。
男は言葉を忘れてしまっているみたいに、
ただ絶叫しつづける。
顔を固定されて、もう見ないわけにはいかない。
瞼を閉じる、という簡単なことさえ忘れてしまった。

娘　だからここにおるんやろ。それが抵抗なんやろ。

叫んでいるのは、涅槃の男だろうか、
それとも、やってきた若い男だろうか。
そのどちらも。

絶叫のさなか、
境界線の一本ラインをゆっくりと、
母が歩いてやってくる。
まるで薄い氷一枚の上を、
割らないように慎重に、
ゆっくりとやってくる。
言葉のような、記号のような、声と一緒に。

「ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡらわななな。
ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡたしらな、
ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡけわけしてな、
ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡすれるな。
こっちとな、

あっちはな、
ＷＡんだふるＷＡ―るどおんなじな。
ＷＡＡＡＡＡＡいうても
ＷＡＡＡＡＡＡいうたら
ＷＡＡＡＡＡＡのお顔はちがうけど。
ＷＡたしらな、
ＷＡかってる
ＷＡＡＡＡＡでＷＡ―るど出来てるねん。
ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡろてるねんで。
ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡからんか
言うたろうか
言うたるな
人間なんかＷＡ
ただ食って飲んでＷＡ
犬のようにはいつくばって歩きまわるＷＡ
時々目が醒めてＷＡ
少し、喋る　ＷＡ
すこししゃべる　ＷＡ
すこ　ししゃ　べる　ＷＡ
す―――
こ―――
ししゃ
べ―――
る―――
ＷＡ
人間なんて、ＷＡ
そんなもんやＷＡ
ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡらわなな
ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡ　ＷＡらわなな」

母　おかえりなさい。

それは未来の時間なのか、
過去、穏やかであった頃の時間なのか、
母の思いの渦なのか、

いいや、これは毎晩境界線付近まではやってきて、
繰り返される母の言葉なのだ。
娘と男は、じっと母を見ている。

母　帰ってきたらすぐ寝そべるんやから。ご飯やで。あの子今日も仕事で遅いて。なんか食べて帰ってくるってさっきメールあって、もう、ご飯や言うてるのにすぐ寝そべる。

ゴロンと涅槃の男が寝返りを打って背中を見せると
なんだかまるで父親のようにも見えてくる。
母はなにかをしながら。
父親に言っているのか、独り言なのか。
どっちでも同じだけど。

母　今日な、川口さんが、あ、朝の電話のパートが一緒の人な、一か月のノルマが２０件やねんけど、いや、こんな無茶なノルマないわ、必死のパッチでやっても１５件取れたらすごいねんから、社員でも一か月５件が最高やねん。それがなんでパートのノルマが２０件なん、おかしいて、言うても通用するわけあらへんわ。でな、川口さん、先月ひとっつも契約なかってん、あるねん、そんな月もあるねんけど、朝、朝礼でいきなりやん、部長が「川口くんおつかれ一言どうぞ」言うて。契約書にも書いてあるて、一件も取れんかったら即解雇やて。そんな虫みたいなちいさい文字の契約書なんか見るかいね。何十枚もあんのに。ま、でも川口さんがな、新しい仕事先見つかった言うて、たまたま道端であったら、何や知らんけどそらもう目輝いて肌ぴかぴかで、ええ、あんたどないしたん言うて。「いや、こんな年やしここしかない、思ってしがみついてたけど、今の職場がええとこやねん」言うてな。転職したろか、なぁ？

母、境界線のこちら側の娘に言葉をかけた。

母　ここで、ただいま、って、帰ってくるねん。
娘　…
母　聞いて聞いてって、小学校から帰ってくる子どもみたいに、話とうてしゃあない、みたいに。
娘　…
母　新しい企画が通ったんよ、でもいいし。昇進したんよ、でもええねん。なんでもええ。ここで、ただいまって、帰ってくるねん。なんやどうしたんやって、お父さんがゴロンってこっち向いて笑う。ええからはよご飯たべぇなって言うてお茶入れるな。そしたら、食卓に座る。
娘　それ、いつの話…？
母　あほやなぁ。昔の話は未来の話と同じやで。これはな、未来のあんたの話。

娘　戻ってきて。
母　これは、もしかしたら未来のあんたがおかえりを言うかもしれへんで。
娘　戻ってきて。
母　そんなことを、毎晩想像してもええやない。タダやで。エネルギーは頭の隅っこで動いてる。

母親は未来を想像する口調から
ぱちんとはじけるようにして目覚めて、
はっきりとした言葉を娘に投げる。

母　はよ行きなさい。いつまでもおらんと。
娘　待ってるねん、戻ってくんのを。
母　ただいまやなくて、おかえりのほうを言うために。はよ行きなさい。

母親は、同じことを毎晩繰り返す。
未来を想像しては、
今を過ごす。
繰り返す、同じ動作は月日を表すだろう。
よく見る。
食卓の用意をしていたと思っていた母親の動作は、
よく見ると、何かを拾っているように見える。
正確に言えば、そのような動作に変化していったのかもしれない。
拾う、ナニカ。
それは、境界線の向こう側に戻っていった人々の
骨かもしれない。
一つずつ、拾って入れる。
拾っては入れる。
誰の骨とも分からないけれど。
それと同じ動作を、若い男も始める。
彼は今現在の時間の中で、
もうずいぶん昔に朽ち果ててしまった人々の、
母親が拾い切れなかった人々の骨を、
確実に拾い上げて納める。

男　過去の検証に必要なのは客観性。
母　お母さんな、なんや知らんけど、今ようやっと分かったわ。

男　引っ張られないように、
母　食べて飲んで眠らななぁ。
男　確実な、データの、積み重ねを、
母　人間やもんな。
男　見る。
母　だいたいぼんやりしてるけど、
男　予測は、思い込みを、排除して、
母　時々、全部のことが分かる瞬間があるわ。
男　引っ張られるな。
母　一瞬やで。すぐ消える。で、またぼんやりする。
男　これは、涙じゃない。
母　あほやなぁ。
男　これは、汗。
母　ご苦労さん。
男　これは、分泌物。
母　大変やねぇその仕事も。
男　これは、ただの反応。
母　私らがまだこんなに残ってるから。
男　こんな夜を、
母　ご迷惑おかけします。
男　あなたは幾度超えてきたんでしょうか。

若い男は、無数の骨を確認してぐっと涙を堪えるしかない。
そして涅槃の男に問いかける。
涅槃の男はゴロンとこちらを向いた。
母が想像するような、父親の笑いの顔ではなかった。

涅槃の男は欠伸で答える。
その欠伸はこう言っている
「腐るほどの時間」
「腐らんかったけど」

星もない。
雲もない。
ぼんやり、
ランプの灯りしかない。

灯りと闇と影だけがある。
繋がったままの男と娘が
少し疲れた様子で、
ひたすら境界線の向こう側を見ている。

男　何日経った？
娘　数えてない。
男　なんか聞こえるか？
娘　世間は真夜中や。
男　世間ってどこにあるねん。
娘　人間がおったらやろ。
男　何日経った？
娘　数えたないわ。
男　お前、いつまでおるねん？
娘　あんたが動くまで、
男　…
娘　と思ってたけど。
男　けど？
娘　私、もう逝くわ。
男　そうか。
娘　あんたなんか待ってられへん。
男　そうか。
娘　あんたはいつまでおんの？
男　さぁ。お前の、おかんが言うてたから。
娘　何を？
男　未来が来るまでや。
娘　ミイラになってまうわ。
男　ダジャレは嫌いや。
娘　なんも変わらんで。
男　そうかな。
娘　人間やもん。
男　人間や、もんな。

じっと、男は娘を見ている。

男　何日経った？
娘　何回聞くねんあんたぼけてんの？

男　人間やから…
娘　なに？

男にとって幸い、というか、娘の片手の自由はもう封じられている。
そして娘の太ももを大きく開けたがるだろう。

娘　ハッ、なるほどなぁそうなるわな。
男　すぐ。すぐ済むから。すぐ。

男　いそいそ。

男　ほんますぐ、すぐやから。
娘　あほやなぁ。こんなときでもしたなるて。
男　ごめん、ごめんな。ほんま、ごめん。
娘　…ちゃう。
男　え？
娘　私がや。

男、ふと娘の何かに気が付く。

男　…！

娘の太ももにしっかり触れて見て確認する。
胸を揉んで確認する。
唇を吸おうとして、
思わず身を引く。
はじけ飛ぶように。
見えないものが見えたのかもしれない。

男　…お前、
娘　何よ？
男　お前…真っ白やんけ。

そしてまじまじと娘を見る。
距離を取って。

男　いつから？どうしてん？
娘　…何言うてんの？
男　え？
娘　なんもどうもなってないやん。
　真っ白な娘が少しだけほほ笑んだ。
男　なんもなってないって、お前そんなわけ、…いつからや？
　男、ゆっくりと娘の足や太ももを手のひらでこすってみる。
娘　…何してん？
男　とれへん…
娘　なんかついてる？
男　とれへん。
娘　いたいいたい、力強い。
　何度か娘は逃げようとするが、
　男は掴んで離さず、何度も何度もこすってみる。
男　とれへん……
　足や腕だけでなく、娘の頬も額も。
男　とれへん。
　白い何かが取れやしないかと、こすってみる。
男　とれへんとれへんとれへんとれへんとれへんとれへんとれへんとれへんとれへんとれへん。
　男は娘の体中をこすってみる。
　何もとれはしない。
　見えない何かは、どうしたってとれない。
　娘の体が、どぅるん、と力が抜けているのは
　こすられているせいではない。
娘　しっ。

ぴたりと男の手がとまる。

娘　し―…

男　…

娘　聞こえへん？

男　…いや。

娘　ちゃんと聞いて。

男　…

男と娘は耳を澄ます。
そして、境界線の向こう側を見た。
本当に聞こえたかどうかは別として。

娘　お茶碗の音がする…

コトンコトンと包丁の音。
カチャンとお茶碗が当たる音。
夕食の用意をする風景を娘が想像する。

娘　笑ろてる…？

男　…なんも、聞こえへんで…

娘　…じゃあ、これは、

娘はきっと目を閉じる。

娘　未来の食卓の音かなぁ…

娘、キツク結んだ紐から手首をするりと抜く。
娘は一歩一歩、男から離れていく。
やがてランプの灯りも届かないところまで離れたのか、
娘の姿はもう見えない。
男は、正確には若い男はさっきまで娘の手首が入ってた
紐、その輪っかの部分をじっと見ている。

男　…もう、ひとり、いたのでしょうか…？

涅槃　俺なんか待たんと、行ったんや。海越えて。絶対そうや。

そうかどうかは、涅槃が一番よく知っている。

涅槃　おう、見ろや。にいちゃん。

男、ランプを少し掲げた。

涅槃　何万回見たか、もう数えてないなぁ。見えるか？

うっすらと、太陽の光。

男　僕にはあれは美しく見えますが、

涅槃　大地を焼く火の玉に見えるな。

男　あなたにはどう見えるんでしょうか。

涅槃　ふふん、小２男から成長したで。見たまんまと、世界は違う。見えへんからな。

男　日の出の時刻です。

そして男はランプの灯りを消して、

男　それとともに上演終了の時刻です。

男は涅槃の男をきれいにするために広げた道具を片付け始める。

片付けながら、

男　あるはずもない、あるかもしれない、その先へ先へ。希望を語るかそれもいい。希望をひきちぎった世界をゴロンとここへ置くかそれもいい、踏み越えるか踏み倒されるか知りたきゃミイラになっても見届けろ。

男は涅槃の男が包まれていた布を手に取り、

涅槃の男を包む。

きっちり包み込むと、

白い女たちがやってくる。

全身の化粧を落とすためのものを抱えて、

タオルをしぼり、顔を拭く、
腕を拭く、
足をふく、
首をふく、
きれいに落とせなくてもかまわない。
人間の皮膚がのぞき見えればそれでいい。
生きている肌色が見える。
全身を拭きながら、
２人の女は言葉を口にする。

その時私はコーヒーを飲もうと立ち上がりました。
その時私は少し遅めのご飯を食べていました。
その時私は得意先に連絡しようと受話器を耳に当てた瞬間でした。
その時私は退屈な小説を読みながら船を漕いでいました。
その時私は駅の自動改札に引っかかっていました。
その時私は営業事務の女の子を誘っていました。
その時私は自転車のサドルをなおしたところでした。
その時私は注射針の交換の最中でした。
その時私は愛想笑いをしていました。
その時私はトイレの流れる水を見ていました。
その時私はお弁当をゴミ箱に捨てていました。
その時私は下着を脱いでいました。
その時私は嘘をついていました。
その時私は線路に石を置いたところでした
その時私は泣き止まない子どもを殴り飛ばしていました。
その時私は遮断機をくぐったところでした。
その時私は魔がさしていました。
その時私はあの子にキスをしました。
その時私は泣いていました。
その時私は怒っていました。
その時私は笑っていました。
その時は。
私はここにいました。
その時も。
私はここにいました。

「しっ」と、若い男が唇に指を当ててその先を見た。

これからその先も。
私たちはここにいるでしょう。
若い男は拡声器から声明。

男　ここは、かつて、僕らの、故郷、だった、のかも、しれない。
僕らの言葉はやがて消滅するでしょう。僕らは、この言葉を日常的には使わない。家庭でさえも使わない。同郷だと思う相手であっても、そうだとは限らないので、使わない。僕らはこの言葉で未来を語ることを放棄しはじめた。過去を悔やむことも放棄しはじめた。このような独り言は口からこぼれると町を歩く足音に踏みつけられてへしゃげる。今のことだけを考えようとした結果未来その先には、僕らはこの言葉を失うだろう。人間は未来と過去のことを話さないと、今さえも失ってしまうのだと、僕は予感している。そして語るべき言葉を失うと、それを表すモノさえ、消えてしまうのでしょう。はじめまして。僕らの…なんて呼べばいいのか。ご先祖、と、いうわけでもなし。オリジナル、と、いうわけでもなし。僕らの、故郷で生きていた、僕らと同じ姿をしていただろう、あなた。

寝台の上、
はらりと布がひとりでに開かれる。
そこは寝台の男の場所。
ここから境界線の向こうの世界を見ていた涅槃の男がいた場所。
今はいない。
未来のものはそこにはまだいない。
ぼろぼろに朽ちた紐、
キツクキツク結ばれていたあの紐だけが
真っ白な布の上にあるだけ。

若い男、拡声器のサイレンを鳴らした。
と、同時にエンディングの音楽。
スタッフロールが延々と延々と流れ続ける。
その間に当たり前のように舞台は片付けられていく。
スタッフロールが最後まで流れきると、

その舞台にはもう何もない。
唯一あるのは一本の白い境界線。

WWW 001 WWW 001 WWW 001 WWW 001 WWW 001 WW

W 001 WWW 001 WWW 001 WWW 001 WWW 001

WWWPROJECT&PRODUCTION 001WWWWWWDIRECTOR MI

YUKITANASEWWWWWWPLAYWRIGHT MIYUHIGUCHIWWWW

WWCAST YAYOIDEGUCHIWWWWWWHIDEHIKOMARUYAMAW

WWWWWAKEMIJOUWWWWWWMASAYAKITAMOTOWWWWWWWWW

STAFF MIYAKOKAWAMURAWWWWWWHIROKIOONISHIWWW

WWWKENNICHIKASAIWWWWWWHIROTOSAKAIWWWWWWMAS

AHIROOZAKIWWWWWWTHANK YOU YOU ARE KINDNESS

WWWWWWYOUJISAKATEWWWWWWNEIHASEGAWAWWWWWWSH

UUMATUIWWWWWWAGORA THEATERWWWWWWWAIL WWWWA

IL WWWWAIL WWWWIND WWWWAIL WWWWIND WWWWAIL

WWWWAIT AND SEE WWWWAIT AND SEE WWWWAIT AN

D SEE NEVER WWWWAIVER WWWWAKE UP TO WWWWOR

LD WWWWANTING WWWWANTING WWWWANTING WWWWAN

TING IN WWWWORD WWW WWWWAIT UNTIL THE STEW

WWWWARMS UP WWWWARNING WWWWEALTHILY WWWWAY

WWWWE WWWWEE WWWWEEPY WWWWELCOME WWWWELD W

WWWE WWWWERE WWWWET WWWWHAT WWWWHY WWWWHER

E WWWWHEN WWWWHICH WWWWHIFF WWWWHITE WWWWH

O WWWWHO WWWWHO WWWWHO WWWWHO WWWWHO WWWWH

OWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWW

WWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWW

WWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWW

WWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWWW

と見える文字はいつのまにか心電図のように見えてくる。

動いていたはずの心臓はやがてフラットになる。

まるで境界線のように、一直線に光る。

誰の？あなたであってもいいし、あなたでなくてもいい。

これは世界の心電図なのだから。

おしまい